

新

歌人群像

# 金田千鶴

● 昭和恐慌の山村になびく風知草

● 田井安曇 ●



千鶴の盆歌

一九三四（昭和九）年の盆過ぎ、三十一歳の金田千鶴は山の上の実家で家族に手厚く看護られながら亡くなった。

それは、

空の色蒼く澄みはてて山寂ぶる秋深き

日に死なむと思ひし

と手帳に書いていたより少し早かったが、当時の日本の結核患者の、女性としてはまず幸せな部類に入る死であった。

翌一九三五（同十）年、岡麓が世話をし、在京の先輩歌人・村田利明、信州の友人・吉井もりらが書写、編集、校正、そのほかを進め、『金田千鶴歌集』は当時の名門出版社、古今書院から「アララギ叢書」として出た。十三歳上の兄・一馬が妹に尽くしたのである。当時の風潮として、歌集を持つことはよほどのことであり、ましてそれが女性であったことは稀有に近いのであった。

さらにその翌年の一九三六（同十一）年、娘の夭死をかなしむ父は庭つづきの小さな丘に、千鶴の友人が清書した若い日のあこがれの歌、

右が千鶴、座っているのは姉の紋



夕日さす恵那のいただきよく見えては  
ては知られず澄める西空

を歌碑として建てた。

二〇〇三年現在、村には「あいパークやす  
おか金田公園」があり、「金田千鶴短歌フ  
ーラムinやすおか」に秋深く集まる人々は、  
公園を散策し、恵那山を望み、分外山を歌つ  
た歌碑を喜んで仰いで帰る。

二〇〇二年の千鶴生誕百周年記念フォー  
ムには、NHKの企画でウィーン、ミュンヘ  
ンに斎藤茂吉の跡を辿った岡井隆（現代短歌  
で最も活力があり影響力ある多力者）がこの  
山間に直行し、昭和初期の「アララギ」原本  
から千鶴作品を洗い出し、いかに秀れた表現  
者であったかを浮き彫りにした。東京から五

時間もかかる「日本で一番遠い山村」（村長  
談）に集まった三百に近い聴衆は、すっかり  
これに魅了された。

さて、では金田千鶴の短歌はどのように胚  
胎し、どのように人々の心を把えるものとな  
っていったか。彼女を育てた場、長野県下伊  
那郡泰阜村字平島田を紹介しよう。

上流諏訪盆地の水を集めた湖から溢れ出る  
水は、河口で遠州灘と合するまで一つ名の  
天竜川と呼ばれ、一二三キロメートルを長  
駆する。その間に赤石山脈西麓・木曾山脈東  
麓の水を容れ、飯田までは広やかな谷を持つ  
が、以下は遠州で平野に出るまで峡谷に狭め  
られて苦しみながら流下する。その天竜川の  
刻んだ幾重もの河岸段丘の上の上の上、左岸  
はるかの高みに、彼女が生まれ、育ち、かつ  
死ぬ平島田は位置する。耕地は少なく、いか  
にも山村というしかない眺めである。道路は  
よくなっているが、いくつもの橋で谷を越え、  
山腹を走る。江戸時代、貢租は米でなく樽木  
で納めたと記録される。こうした村の、よく  
働く在地地主の家が、千鶴の生家であった。

展望に関する歌をもう一首挙げておこう。

みなみ空雲夕焼けて果てしらぬ山のあ  
なたの国恋ひにけり（一九二九昭和四年）

病を得て六年、庭つづぎの離れに常臥とな  
って療養している時期の秀歌だが、

野の風のつねかよふ部屋にこやりゐて  
片頬はしるく日に焼けにけり  
（一九二八（同三）年）

などと共に、逸せない自己形象が行われてい  
る。「こやる」は「臥す」ことであり、「しる  
く」は「著しく」と同じである。

夜はもちろん、全く暗い山の上である。一  
人病を養う千鶴の孤独は他者の声を心揺らい  
で聞きとめている。一気に十一首採られ、異  
例の「悉く原作のまま採録」という注をつ  
けられて掲載された中の二首だが、

るろり火をかくみて夜業するらしき  
隣家人らはよく笑ふなり（一九二八年）

を挙げておく。

## 運命

歴史の中の千鶴を少し見とおこう。開国・  
維新・西欧に倣って近代化を進めた政府は、  
隣国清と戦い、勝ち、次いで欧亜にまたがる  
大国ロシアと戦おうとしている。いわゆる日  
露戦争である。千鶴はその直前の一九〇二年

# 金田千鶴

嫁ぐ日、千鶴、18歳



(二十世紀の二年目)に生まれてきたわけである。日本は豊かでなかったし、農村とくに平島田のような山村は厳しかった。

しかし千鶴はすくすく育ち、聡明であり素直に努力し、村の高等小学校八年間を無欠席で卒業している。県立飯田高等女学校に入学、十六歳、無事卒業。十八歳、女学校寄宿舎から遠く離れた名刹大雄寺に嫁ぎ、七か月後、帰家、夫からは再々復縁の招きがあつたが、これを拒み、離婚した。

家事手伝いの後、女性の自立を考えたのであろう、翌年上京、帝国女子専門学校(現・相模女子大学)に入学、終生の師、岡麓に『万葉集』と書を習う。英語学習の必要からか、キリスト教根岸教会に親しく出入りする。教会メンバーから求婚されることもあつたが、破鏡の身をいましめる自制力が強くはたらく、

かなしみながらこれを退けている。

この期、小学校の時の担任で、兄の友だちでもあつた彫刻家、倉沢興世との愛のかかわりがあつたが、兄一馬作成の「年譜」にはない。この愛は死のときまで潜流し、地元飯田の劇団によって「悲恋の歌人」として取りあげられ、千鶴普及に大いに力あつたが、この角度からは一種の通俗化もまぬがれぬところがある。

二十一歳、肺結核発症、父上京、房州岩井海岸にともない転地療養にはげむ。初めて歌三十首を作り、岡麓に送る。三か月後、癒えて上京、出校、再び咯血、退学。二十二歳(一九二五〈大正十四〉年)、六月、大阪府淡輪村自然療養舎ホームに入舎療養、ほぼ二年後に病勢衰えて帰省。この間に「アララギ」に入会、会員となる。三年後には注目される作家として「其二欄」

に推され、やがて「婦人サロン」「婦人公論」などにも作品を発表するようになる。

麓門の同人誌「つばさ」に農村小説「夏蚕時」などを発表(これは後に長野県高等学校

国語研究会教材として推奨配布されている)。

振り返れば、右のとおり、つまり歌人として頭角を現したのも、病とまったく離れられなくなったのも、千鶴の場合、ほとんど「昭和」に入つての九年間であつた。

## 自然・社会への透視力

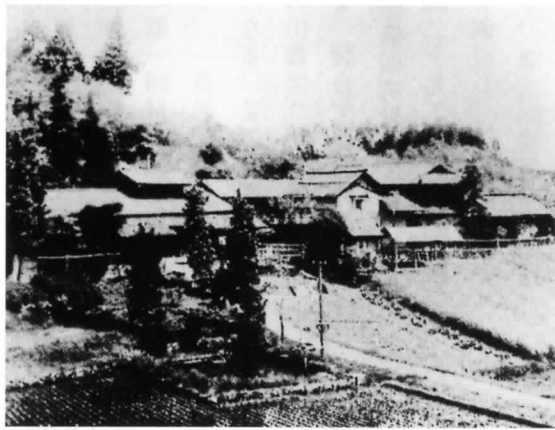
恵まれていたとはいえ、当時、結核はほとんど死病にほかならなかつた。彼女はいのちを見つめ、家人をみつめ、村を、ひとを凝視してほほえむように抱きとつて歌っている。

目の前の谿に夕日はしづかにて寂しき  
までに映ゆるもみぢ葉

天龍川のゆたけき水は昼も夜もながれ  
ながれてありと念はむ

いずれも一九二九(昭和四)年の自然詠だが、前者の見えている「もみぢ」、後者の見えていない段丘下の「天龍川」、ありきたりの「自然詠」という偽ものから切れ、ここには作者の思想といえるものが滲み出ているのである。

「大正アララギ」(島木赤彦に象徴される)について、「もう使命を終えた」とノートし



千鶴の実家。右端は、千鶴が療養した隠居所  
(写真は4点とも『金田千鶴文学あるばむ』より)

すこやかに働きてゐてどこよりか年暮るる家にかへりて来たし  
田の畦あぜに寝かさるる子よその父母に抱きあやされて育つにあらざ  
小作争議つばさ起る噂なき村のうち事なく過ぎてゆくにはあらず

ていた彼女は、病を押しての小説執筆に見られるように、たしかに「社会」が見えていた。小説を書かせる目が歌をそこへ向けたとも、歌のリアリーを追ううちに散文の写実を会得していったとも、とにかく両々相俟りよりあひまつてここに至った。

いずれも「世界恐慌」の波を真つ向から浴びる村の中に、きりきりと「社会」を透視している歌である。特に三首目の争議の歌は、平地の村でさかんであった大地主対多数の小作という争議さえ、小所有のこの村では起こりえず、だから平穏というわけでないこと、つまり村内の内庄は、後年「満蒙開拓義勇軍」に村人口の三分の一を送り出し、第二次大戦の敗戦により多くの犠牲を出さなければならなかった事情を見抜いているともいえる表現である。これらの歌の作られた一九三二（昭和六）年、千鶴の歌は「婦人サロン」「婦人公論」、そのほかの誌面を飾ったが、社会にもっと農山村を知ろうという要請があった表れであろう。

## 終わりに

貧しさを知らざるもの言ふことと 蔑さげす  
む人は吾あをくるします

と、一九二九（昭和四）年に歌っている。村人の皮肉や憎悪に耐えて、これらの歌を歌いぬいたのであった。病弱ということと意志の強さはここでは相反してもいようか。

さて、「悲恋の……」というような位置づ

けに對しては、私は黙つて、

あはれなりしものと一度ひとひいや切せちに憶おもひ  
起したまふことあらば足る

の遺詠の一首を差し出せば足りるかと思つている。「せち」……なんと哀切な歌であろうか、裏切つた「恋人」をさえ、慈母観音のように抱きとり赦ゆるしているのである。

あと一首添えれば、同じ遺詠の中から、  
外の面おもにはうつつに鳥の啼なきてゐてな  
ほいく日かわが在りぬべし

三十一歳という若さで亡くなる人のこの大悟、改めて私はすごい人だつたなと思うのである。

\*副題中の「風知草」、彼女および選集編者の池田寿一氏は「知風草」と書いているが、今日の植物名表記の通例にしたがった。別名「かぜ草」、風を予知すると人々は感じたのである。

\*金田千鶴を全村挙げて村の財産として大切にしてくれたのは泰阜村である。また、ここまで千鶴の歌を津々浦々に発信しつづけたのもこの村である。一度は訪れたい天上の村である。

\*県外者の私などが千鶴をわずかでも語れるよう、資料（歌、小説、日記、その他）を整えてくださったのは、郷土伊那谷の人々である。手頃な歌集に、文庫本『金田千鶴歌集』（短歌新聞社・全七三四首）がある。

（たい・あずみ「綱手短歌会」編集発行人）